

ザンデルリンクとドレスデン・フィルのケミストリー、その総決算を聴く

2013年をはじめに、15、17年と一年おきに来日してきたミハエル・ザンデルリンクとドレスデン・フィル。ミハエルは今シーズンをもって8期務めた首席指揮者を勇退するが、今回の日本ツアーはまさにその幕引きとなるプロジェクトである。幸運なことに東京の聴衆は極東の地にあつて両者の協業を定期的に聴く機会を得てきたが、その体験がなぜエキサイティングだったかといえ、彼らがドイツの、そしてオーケストラ音楽の新しい型を示してきたからではないか。

ソニー・クラシカルからリリースされた新旧二人のシンフォニスト、ベートーヴェンとショスタコーヴィチをカップリングする録音プロジェクトは、一足先にベートーヴェンの全集が完結したが、これなどは現代のオーケストラ音楽のアクチュアリティを映しているといえよう。

20世紀後半に起こってきた古楽復興運動はモダン楽器によるオーケストラ演奏にも様々な知見を与えた。足が速く、電撃戦のように刺激的なそのスタイルは、低音を土台に巨大なホールを厚い響きで覆うそれまでのシンフォニックな響きと鋭いコントラストを作ったが、21世紀に入り前者の知見を取り入れることで、モダンオケのサウンドを刷新していこうとする流れが現れた。ザンデルリンク&ドレスデン・フィルはその潮流をさらに進化させたが、これには時代の流れを読むザンデルリンクの感度のほかに、彼がチェロ奏者として弦についての具体的な知見を持っていたことも寄与しているだろう。量感のあるサウンドと透明度を二つながら手にしたドレスデン・フィルの柔軟で合理的なアプローチは、ベートーヴェンによく表れている。

過去の来日でも披露した20世紀のシンフォニスト、ショスタコーヴィチに対しての彼らの思い入れも通り一遍ではない。ミハエルは父にクルト、兄にトーマス、シュテファンという傑出した才能を持つ指揮者一家の出だが、何と云っても父クルトは旧共産圏の音楽をけん引した東ドイツの巨匠だった。その同時代人がショスタコーヴィチだ。

今シーズン、彼らは2、3、9、14、15番とまさに総仕上げというべき勢いでショスタコーヴィチに取りくんでおり、未発売のナンバーも近日中にCDとして聴けるだろう。そのスポーティーで力強いスタイルがショスタコーヴィチ特有の諧謔と戯れながら生むドラマには、単なるカタルシスという言葉では片づけられない凄みが漂う。筆者にはそこに曇天下のドレスデンの町並みに映し出された歴史意識が重なって見える。統合から30年が過ぎ共産圏時代の記憶も薄れてきているが、ミハエルも青年期まではそうした体制の中で生活していたし、ドレスデンの文化施設や団体は常に東ドイツ文化を表象する役割を担わされてきたのである。

今回は他にも「未完成」や「新世界」といった定番のシンフォニーが聴けるが、とりわけブラームスは彼らの重要なレパートリーだ。今シーズンもピアノ協奏曲第1番(独奏:マルティン・ヘルムヒェン)、ピアノ四重奏曲(シェーンベルク編のオーケストラ版)のプログラムでヨーロッパツアーを行ったほか、ニコラ・アンゲリッシュのソロでピアノ協奏曲第2番を演奏。来日直前にはドイツ北部の音楽祭で今回の帯同アーティスト、ユリア・フィッシャーとヴァイオリン協奏曲を共演する。また交響曲第1番は2013年の彼らの初来日時にも取り上げており、今回の再演はその到達点を示してくれることになるだろう。